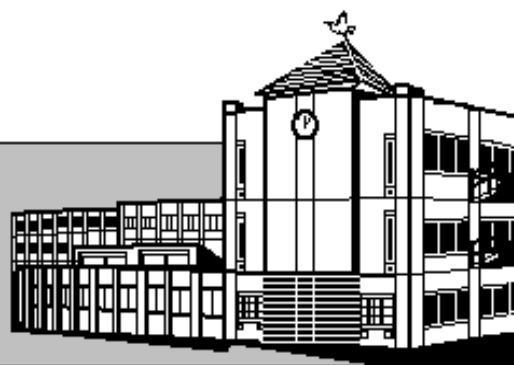


図書館だより



2000年度 第3号 (2001年1月)

編集・発行 敬和学園大学図書館

目次

「図書館」は誰のもの?	国際文化学科教授	石川喜一	(1)
J.D.サリンジャー 「ライ麦畑でつかまえて」を読んで.....	97E047	熊谷美智子	(2)
2000年度新規購入雑誌リスト.....			(3)
事務室より.....	図書館長	北嶋藤郷	(4)

「図書館」は誰のもの？

国際文化学科教授 石川喜一

「図書室」は本が沢山あって楽しいところだ、黙って本を読んでいる限り叱られないところだ、ということが私の意識に上ってきたのは中学生の頃だったと思う。中学、高校と図書クラブに入って本の整理の手伝いをしたり、部屋の掃除を手伝ったりしたのは子ども心にもお礼の気持ちが自然と湧いたからだと思う。とにかく、図書室にいと気持ちが落ち着いた。しかし、授業はあるし放課後あまり長くは開いていないし、あまり長くは居られなかったのが口惜しかった。猿飛佐助、南総里見八犬伝、岩窟王、孫悟空、江戸川乱歩の少年探偵団、などは家で眠い目をこすりこすり布団のなかで読み、夢の中で自分が主人公になったりした。図書室ではまじめに夏目漱石、芥川竜之介、森鷗外、徳富蘇峰などを読んでいた。もちろん、ほんの一部でしかなかったし、先生が授業で紹介してくれたものがほとんどだった。それでも、図書室には自分の空間があった。自分の時間があった。

「図書館」というところに入ったのは、新発田市の市立図書館が最初だったと思う。しかし、怖いおじさんがいて、ちょっとでも音をたてると叱られた。だから、余程でない

と行かなかった。学校の図書室がよかった。大学では独立したレンガ造りの医学部図書室があった。床はリノリューム張りで油で磨かれていていつもツルツルしていた。全体に採光はあまりよくなかった。しかし、落ち着いた雰囲気があった。ふだん授業でしか見かけない先生方が静かに学術雑誌を読んでおられた。自分の空間ではないと思った。だから、医学生時代にはあまり図書館には入らなかった。

卒業してインターン(臨床実習)を終えると基礎医学の生化学講座に入局した。医学部は講座単位で組織されていて、基礎医学には解剖学、生理学、生化学、細菌学、衛生学などがあったが、その講座に所属し研究するようになることを入局という。講座には教授、助教授、講師、助手、副手、大学院生、研究生、実験補助者、用務員など約20人位の人があった。副手にしていただいたが、給料はなし。同級生で基礎医学に入局したのは私だけで、あいつは変わり者だといわれた。しかし、臨床講座に入局して結局は基礎医学者になった同級生が5人もいるから、いまでは誰も私を変わり者と言う者はいない。ところで、講座には図書室がある。そこには講座で購入している新着学術雑誌があ

る。世界の研究室とつながっている。特に、生化学教室は伝統があり、教授には代々、東京大学医学部から優秀な若い研究者が来るようになっていた。後に順天堂大学を創立された有山登教授、脚気の研究で有名な島菌順雄教授(後の東大医学部長)などが教室の忘年会には必ず出席された。そして図書室には歴代の教授が丹誠されて集められた学術雑誌があって、いつでも読めた。教授室の隣にあってちょっと緊張したものの、自分の空間があった。自分の時間が持てた。

留学先のボストン市で最初に入ったのはマサチューセッツ総合病院の皮膚科の「図書室」だった。ハーバード大学の大学図書館は隣のケンブリッジ市にあり世界中の図書があるのではないかと思われる程大きな図書館だった。外から見ると大英博物館のような立派な建物でその前の広場では卒業式が行われる。中にいると身が竦むような気がしてあまり入らなかった。自分の図書館ではないと思った。むしろ、ボストン市立図書館が好きだった。すぐ前には直径が10メートルもある大きな花時計があって、春には色鮮やかに花が咲いて映画の中のように綺麗だった。ハーバード大学医学部に移ったとき、医学部の建物の裏に素晴らしい医学図書館(Conway Library)ができた。まるで、豪華なホテルといった感じで、世界中の医学雑誌があった。新潟大学医学部が日本語で発行している学術雑誌まであって、度胆を奪われた。

山形大学に移った。山形大学医学部は昭和48年に新設され、瀟洒な二階建の図書館が事務棟の隣にできた。新着学術雑誌が一番の情報源である医学研究ではできるだけ種類の雑誌を購入したい。そこで全講座が4、5千万円を出し合って、ダブって購入しないように一括購入し集中管理していた。調度品も上質で落ち着いた雰囲気があって、自分の図書館だという気がした。講座にも図書室を設けたがこれは集会室で、医学部図書館こそ自分のものだった。だから、館長になった時、丁度ヒポクラテスの胸像が設置されたのを機会に幻想的なリトグラフを数点購入して飾り、目休めとした。玄関から二階の受け付けに行くまでは石庭的な箱庭があり、階段にそって月山の高山植物の写真、それに博物館から貸し出していただいた油絵を数点飾った。自分の図書館だというつもりで、どうしたらいいか、図書委員はもとより皆の意見を聞いて使いやすい図書館にするために努力した。お蔭で論文を書くために図書館に通う先生方が増えた。試験前には学生が大いに利用してくれた。

7年前の5月末に、ドイツのハイデルベルグにあるドイツ国立がん研究センターに文部省短期在外研究員として1ヶ月滞在した。ここの図書館は大きくはないが、独立した平屋建てで各デスクに自然光が届くように工夫されていた。ゆったりとした気分で雑誌や論文が読めた。なにか自宅の部屋で本を読んでいるようだった。ヨーロッパでも歴史を誇るハイデルベルグ大学の図書館はダウンタウンに

あって古色蒼然とした大きな建物であった。中に入ると既にコンピュータが数台置いてあって学生が検索していた。いまでは当たり前となった光景だが、当時としては電子図書館の時代の到来として印象深かった。しかし、私は研究センターの図書館が好きだった。

山形大学の附属図書館長を拝命した年に、それまで概算要求し続けていた附属図書館の建て替え要求が認められて建て替えることとなった。既存の部分も残して敷地面積は二倍となり、それまでなかった視聴覚マルチメディアセンターもできて明るく利用しやすい図書館となった。それまで大学の近くにある県立図書館にいていた学生達が戻ってきた。試験前はほとんど満席状態だった。四階建てで大学図書館らしい静かで落ち着きたい空間があった。しかし、これまで図書館は研究する教官のものであって、教育をうける学生のものではないという意識が強くて学生向けの図書は極端に少なかった。「これは本末転倒だ」と私は考えた。教官には研究室があり、図書費もあってある程度本や雑誌が購入できる。学生は教室以外では何処で読書をし勉強したらいいのだろうか。私達の年代と違って今はアパートに住む学生が大半だろうけれど、やはり図書館の落ち着いた雰囲気、自由に取り出して読むことができる書棚、自宅やアパートでは得られない高度で多種多様な情報、は学生にとって必要だ、と考えた。大学図書館は学生と教官のものである、学生は高い入学料や授業料を払っているのだ、と主張して毎年1千万円づつ3年間、学生用図書を購入することを各学部代表の図書委員に認めていただいた。強い抵抗があって充分とはいえなかったが「図書館は学生のものである」という思いが実ってうれしかった。

昨年4月に敬和学園大学に着任して図書委員となった。さっそく図書館にいい図書館だな、と思った。私の図書館だと思った。同時に、みんなの図書館だ、と思った。自然科学系の研究をしてきた者にとって読みたいと読みたいとフラストレーションが溜まるような多くの本があるし、静かな環境はあるし、上質な雰囲気がある。この大学にきた甲斐があったとすら思った。ただ、いい目休めがない。白い壁に囲まれているのはすこし堅苦しいし、潤いが少ないように思った。リラックスできる、そして上品な書画があればいいな、と思った。これからは否応無しにIT革命が進み、図書館はその波に曝されることと思う。現に図書館内にあるコンピュータ室は手狭でもっと場所が欲しいという要求がある。もっともなことであるが、図書館にその場所を求めるのはちょっと違うのではないかと、思う。この図書館は敬和学園大学に入学した学生、教員みんなのものであって、その静かな雰囲気の中に過ごす贅沢な余裕は守るべきだろうな、と思った。これからこの図書館はどういう経緯を辿っていくのだろう。保守的といわれてもいい。私はこの「みんなの図書館」の静かな雰囲気を守って行きたいと思う。

J. D. サリンジャー 「ライ麦畑でつかまえて」を読んで

97E047 熊谷 美智子

「ライ麦畑でつかまえて」というサリンジャーの唯一の長編小説は、1951年に出版された後、世界中で爆発的なヒットを遂げた。もちろん日本でも長期にわたって売り上げが伸びている。特に若者の間で非常に人気が高かったそうである。今では「50年代のアメリカを語る時には、この本なくしては語れない」とまで言われているというが、何故そこまで人々の関心を集めたのであろうか。

主人公はホールデン・コールフィールドという16歳の少年である。しかし、彼は従来のヒーロー像、つまり勇気があり間違っただけの汚れているものに真正面からぶつかって解決していくというような人物とはかけ離れている。周りの人達や社会を“phony”(インチキ)であるとして憎悪しているにもかかわらず、それらに立ち向かっていく姿勢は示さず、逆に逃げ出そうとする。そんな彼ではあるが、どうしても憎めないのだ。それよりもむしろ、共感を覚えてしまう自分がある。ホールデンの考えや行動は、確かに大人から見れば間違っているだろう。しかし彼とさほど年がかわらない私から見れば、共感できる部分がたくさんあるのである。この小説が若者に受け入れられ、熱狂的な支持を得た理由はここにあると思う。ホールデンは悩める若者の代弁者であったに違いない。彼ほど繊細で傷付きやすくはなかったとしても、若者達の誰もが一度は経験する苦悩、そしてそれをどのように乗り越えていくのかをホールデンが示してくれたのだろう。

また、ホールデンにとっては「女性関係」や「性」のテーマも非常に重要な課題であると思う。高校を退学になったホールデンの家に戻るまでの3日間を描いているのであるが、その3日間の放浪の間に、彼は様々な女性と接する。

しかしそのほとんどが“phony”な女性ばかりで失望してしまう。彼は賢くて聡明な女性にのみ興味を示すのであるが、一方では売春婦とも接点を持つ。これについて田中啓史氏は著書の中で「思春期の若者として、性に関心を持つのはごく自然なことだ。ときには頭のなかすべてを占領してしまうことさえあるだろう。またその反面、潔癖なまでにロマンチックな夢にこだわるのも青春の特徴といえる。ホールデンもまさに、その性の対象としての異性への関心と、犯すべからざる神聖な存在としての女性への思いとに引き裂かれている。その矛盾こそが青春本来の姿であり、その青春の矛盾を体現しているのが、さまざまな女との出会いをくりかえすホールデンなのだ」と述べている。この性に対する正直な姿勢もまた若者に仲間意識を持たせるのだと思う。

私は卒業論文にこの小説を取り上げたが、それはホールデンと私自身とを重ねてみる部分がたくさんあったからである。ホールデンは自分自身を探す旅に出た。その中で様々な困難に出会うが、最後には自分自身を受け入れ大人になることが出来た。私は19歳の夏に、インドに一人旅に出掛けた。私もまたホールデンのように自分自身や将来のことを見つめ直したかったのである。そこでの経験は、今の私にとって非常に重要な意味を持っている。若者は冒険を求めるものだ。そしてまた、ホールデンのように悩み自分自身を見つけようとする。多くの若者がそうであるように、私もまたその一人であるし、自分探しの真っ最中である大学生であるならなおさら、ホールデンが好きになるに違いない。ぜひ、多くの学生に読んで欲しい作品である。

2000年度新規購入雑誌リスト

	雑誌名	出版社
1	Bulletin of Concerned Asian Scholars	Bulletin of Concerned Asian Scholars
2	Critical Inquiry	Univ. of Chicago Press
3	Cycle World	Hachette Fillpacchi Magazines
4	Harvard Theological Review	Harvard Univ. Press
5	The Journal of Japanese Studies	Society for Japanese Studies
6	Linguistics and Philosophy	Kluwer Academic Pub.
7	Scottish Journal of Theology	T&T Clark

8	Southern Quarterly	The Univ. of Southern Mississippi
9	Zeitschrift fuer Die Neutestamentliche Wissenschaft und Kunde der Aelteren Kirche	Walter de Grueter
10	Tokyo Journal	ネクサス・コミュニケーションズ
11	しにか	大修館書店
12	日経サイエンス	日経新聞社
13	環	藤原書店
14	新潮	新潮社
15	国家学会雑誌	有斐閣
16	週刊金曜日	週刊金曜日社
17	指導と評価	日本教育評価研究会

事務室より

図書館長 北嶋藤郷

2001年1月発行の「図書館だより」には、石川喜一先生より「「図書館」は誰のもの？」という特別寄稿をいただいた。新世紀の大学図書館ビジョンを語るにふさわしい好エッセイである。

石川先生は、1960年代にMGH(マサチューセッツ・ジェネラル・ホスピタル)に留学された。先生が言及されたハーバード大学のメイン図書館のワイドナー図書館は千万冊以上の蔵書を、またボストン市立図書館(開架式)は六百万冊以上の蔵書を誇っている。

名門ハーバード大学(1636年創立)はアメリカ最古の大学である。早世したジョン・ハーバードが遺産の半分と彼の蔵書のすべて(三百冊)を寄贈したことからハーバード大学と呼ばれるようになった。ワイドナー図書館は、英国豪華客船タイタニック号の沈没(1912年)で息子を失った大富豪の母親が寄贈した図書館である。石川先生によれば、この図書館前の広場で、この大学のコメンメント(卒業式)が挙行されるそうだ。イタリア・ルネッサンス様式の建物で知られるボストン市立図書館は極寒の冬を越して、色鮮やかな花々が咲き乱れる春に訪問すれば、さぞかし美しいであろうと想像する。(図書館入館料が無料なのもうれしい。写真撮影は自由だが、フラッシュを使うと叱られる。)

敬和学園大学図書館は四万五千冊を収蔵する小さな図書館にすぎないが、求めればきらきらと輝くような本に巡り会えるはずである。そのような体験をした先生方や学生諸君も数多い、と確信している。

北垣宗治学長はすでに、県下の大学生は、学生証さえ示せば、県内にあるすべての大学図書館を自由に活用できる制度を設けるべきである、という新機軸をうちだしている。

イギリスやアメリカの大学図書館をフル活用された経験をもつ学長は「図書館は学生のものである」という熱い思いをおもちなのであろう。

敬和学園大学図書館は、学生と地域社会に開かれた図書館を目指してきた。開学以来果たしてきた役割とサービスを維持しつつ、学問文化の伝統を受け継ぎ、今までにもまして、学生諸君や地域の人びととの結びつきをより強固なものにしていかなくてはならないと考えている。

